

学区探訪

一・三十一
郷土資料の
六十一号

足利氏と大門

八剣神社の境内には足利尊氏のお墓があります。その石宝塔には、「源尊氏公、足利治部大輔、征夷大將軍、等持院殿妙義、延文三天四月晦日」という銘文がきざみこまれています。

足利氏は下野国（栃木県）の出身ですが承久の乱の後、三河守護になりました。当時の三河は鎌倉街道の交通要地でした。三河の守護となった足利氏は、西尾市に館を

築き、岡崎の明大寺付近に別邸を構えて鎌倉街道の要地と矢作川の船運をおさえていました。足利氏の勢力は三河に植えつけられ一族の中から、北方には細川氏・仁木氏が生れ、南方には吉良・今川・一色の各氏が生まれました。足利尊氏が勤王の兵を挙げようと決心したのも明大寺の別邸だといわれています。このように三河・岡崎と足利氏との関係は深いのです。また細川・仁木は大門学区のすぐ近くです。このように大門と足利尊氏との間にはいろいろなつながりがあるため学区にお墓があるのでしょうか

学区探訪

二・一
郷土資料の
六十二号

三鹿の渡し

今から六百年以上も昔のことです。將軍足利尊氏が京の都から関東へ出かけることになりました。そして矢作川まで来るとい

く日も続いた雨のために矢作川が大水になってしまい、どうしても渡ることができません。困った尊氏は、大門の八剣神社にどうか無事に川を渡らせてくれるようにお祈りをしました。すると不思議なことに八剣神社の森から三頭の白い鹿があらわれまし

た。そして、尊氏を案内するように矢作川を渡っていきます。喜んだ尊氏は、神のお助けと思い、三頭の鹿の後を追っていきま

た。鹿は川の浅瀬を選んですいすいと渡りその後について尊氏も無事に矢作川を渡ることができました。

これが、大門に伝わる三鹿の渡しのお話です。足利尊氏は軍事上の要地である上の渡の大門に館を作ったともいわれています。また尊氏の母親清子の居館が矢作川の渡にあつたともいわれています。清子の法名は等持院殿妙義で石宝塔に刻まれています。

学区探訪

郷土探訪
六十三号

二・二

もう一つの

三鹿の渡し

永禄三年（一五六〇）、桶狭間の合戦の時、徳川家康は今川義元に従っていたため織田信長に攻められました。逃げ出した家康は、やっとの思いで矢作川西岸にたどり着きました。しかし矢作川は大水で川があふれそうになって渡ることができません。家康は大いに困惑してしまいました。すると、対岸の八剣神社のあたりに三匹の

鹿があらわれました。（老松が鹿三頭に化身したとも言われています。）そして、川を泳ぎ渡ってきて家康を背中に乗せて、再び川を対岸まで渡り大門の郷まで連れてきました。矢作川を渡ることができた家康は走って大樹寺に入り救援を求めることができました。この鹿のおかげで助かった家康は大いに喜び、この地を「三鹿の渡し」と名づけました。

この鹿が出てきた松の木は「鹿が松」とよばれて、今でも、北野町に四代目の松があります。

学区探訪

郷土探訪
六十四号

二・三

大門の渡し舟

日名橋ができるまで大門には渡船場がありました。そして大門の人が交代で船頭をしていました。ですから七十歳ぐらい以上の人でしたら船頭をやった経験があります。次のような話も聞くことができます。

大門百戸が交代で毎日渡船をやるんですから、一年に三回とちよつと回ってきよるいや応なしの当番ちゆうのがあって、お客さんがあってもなくても、当番は出て待つ

とる。雨が降って、今日はお客はないだろうという訳で、うちに来ちやうわけです。

そうすると、

「今日は、誰の番だね」というと

「ああ、・・・ちゃんの番だ」と家まで来て

「俺あ、川西へ行くんだけどやつとくれ」

「行くだかい」という訳ですぶぬれになつ

てね、もつともみのかさで行くんですけど

水も、深い時と浅い時がある。浅い時は

へたな人は、自分で水に入って、舟を引っ

ぱって行くんですよ。深い時は竿でやる。

（ユニチカ岡崎工場五十周年記念誌）

学区探訪

二・四
郷土資料
六十五号

大門学区の最近の戸数・人口の増加について新編岩津町史によりまとめました

	昭30	昭35	昭40	昭45	昭50	昭55	昭56	昭57	昭58	昭59
戸数	98	100	103	115	215	506	512	536	576	593
人口	573	545	551	549	875	1777	1875	1967	2119	2217
戸数	37	39	41	49	168	332	363	422	483	502
人口	217	224	211	229	606	1211	1352	1515	1698	1748
戸数	18	17	21	20	285	393	462	423	464	461
人口	108	100	105	114	898	1375	1425	1449	1559	1567
戸数	21	23	23	27	112	259	267	273	286	292
人口	117	122	117	129	403	850	899	923	931	935
戸数	174	179	188	211	780	1490	1609	1659	1809	1848
人口	1015	991	984	1021	2772	5213	5551	5859	6307	6467

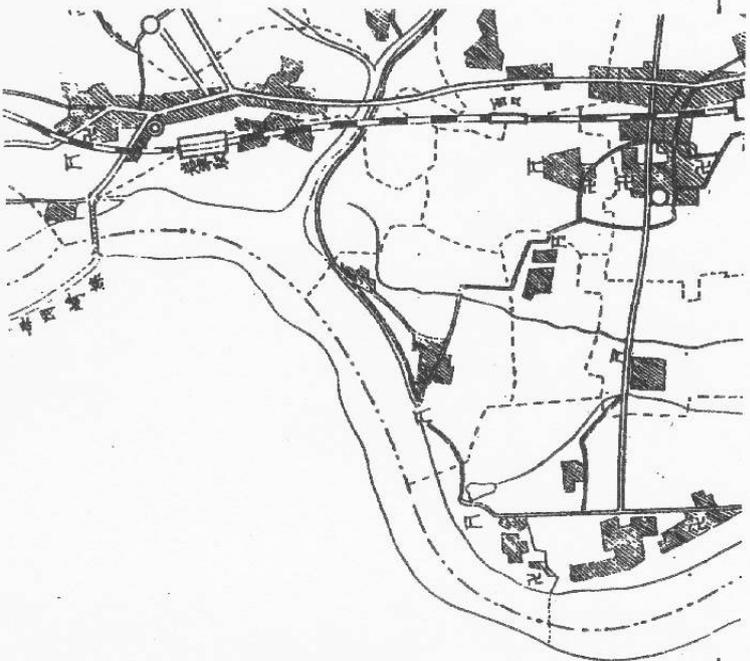
学区探訪

二・七
郷土資料
六十六号

と岩脇より細川を経て門立へいたる支線と
がありました。(岩津町史の地図より)

昔の鉄道

大樹寺のバス停へ行くと、何か駅のような様子であることに気がつくと思います。昔から岡崎に住んでいる人はよく知っているとありますが、昔そこには駅があったのです。三河電気鉄道の大樹寺駅です。三河電気鉄道は岡崎駅から北へ延び、岡崎市内を貫通して岩津町大樹寺駅までを市内線とし、それより市外線となり、岩津・岩脇・上市場を経て豊田(学母)方面へいく本線



学区探訪

二・八
郷土探訪の
六十七号

（昔の交通機関）

岩津町は、岡崎と挙母・東加茂郡を結ぶ要衝にあり、古くから分岐点として多くの交通量がありました。終戦前の交通機関についてまとめてみました。

三河電気鉄道は、明治四十五年に創立され挙母町と岩津町を連結する大切な鉄道でした。昭和二年に岡崎電気鉄道を合併し、国鉄岡崎駅より岡崎市内を通り、大樹寺駅三河岩脇駅を経て挙母（豊田）へと通じて

いました。市内線大樹寺駅までは約十五分おき、市外線岩津駅までは約三十分おきに発着していました。その後、路線の廃止・

変更などを経て、昭和十六年二月に名古屋鉄道と合併し、名鉄

挙母線となりました

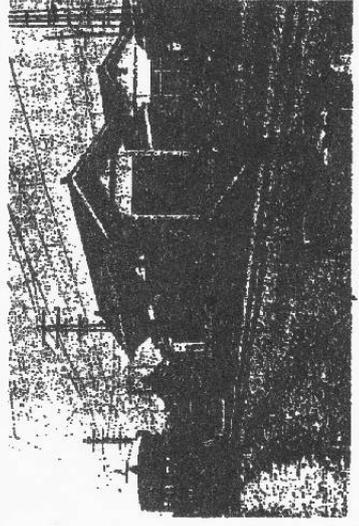
岩津駅はこの挙母線

の中間に位置してお

り一日の乗降客数も

多かったそうです。

岩津り
写真 真岩よ
新編誌
町



学区探訪

二・九
郷土探訪の
六十八号

（続・昔の交通機関）

国鉄バス岡多線は岡多線の鉄道建設の代りとして計画されたもので、昭和五年に開業しました。開通とともに、大樹寺前と三河岩津のバス停が設置され、昭和六年に、三河百々と岩津青木橋の両バス停が設置されました。運行回数は、上り岡崎行七便、下り瀬戸記念橋行七便でした。

愛電バスは明治末期より岩津・挙母間に乗合馬車走らせていましたが、大正九年

に岡崎・足助間のバスの営業を始めました。当時の運賃は康生町から足助までが二円、挙母町までが一円でした。昭和十一年に名鉄と合併して、現在に及んでいます。

尾三バスは大正三年に創業し、岡崎足助間を一日七往復し、挙母・足助間を一日六往復していました。当時はバスといってもお客の注文があれば停留所以外のどこでも気軽にとまるというようなものでした。昭和十二年に名鉄と合併しました。

これらのバスによって、岩津町は岡崎・挙母・足助などと結ばれていました。

学区探訪

二・十
郷土探訪
六十九号

矢作川の舟運

旧岩津町内には、矢作川の近くに遺跡が点在しています。旧石器時代の矢作川左岸河岸段丘遺跡、縄文時代の矢作川河床遺跡そして、大門学区内にも大門遺跡、味噌粕岩遺跡があります。やはり、古くから矢作川が人や物資そして文化の交流に利用されていたようです。

矢作川の舟運は、江戸時代に本格化したようです。舟運発達最大の要因はその経

済性にありました。先ず費用が安くすみません。次に陸上の人馬のように積み下ろしの手間がかかりません。牛馬なら馬方が付きそわなくてはなりません、舟の場合は一袋で百俵の米を積みこんでも二人の船頭で運ぶことができます。少ない人手で大量に輸送できるのです。

矢作川の川舟は、長さ十間半、幅一間半の舟底の浅い舟が主に使われていたようで最高百俵ぐらいの荷を積んで下ったといわれています。上り荷でもっとも多かったのは塩でした。

学区探訪

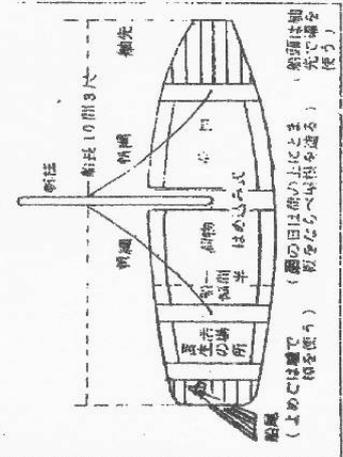
二・十三
郷土探訪
七十号

続・矢作川の舟運

矢作川を帆掛け舟が行き来していたという話はよくお年寄りから聞くことがあります。大門学区においても、お年寄りに聞いてみますと、「遠くからも矢作川の真つ青な堤防を見ることができ、その堤防の向こうを白い帆掛け舟が風を受けて進んでいくのを見ることができたよ。」と話してくれます。昭和の初めごろまで矢作川を帆掛け舟が航行していたようです。

川岸にあつて、舟から人や荷物を揚げおろしする場所を「土場」と呼びます。菅生川筋の土場がよく知られていますが、矢作川筋にも岡崎藩の藩米を舟積みし川下へ送る土場がありました。額田手永の年貢米を

舟積みしたのが、上里土場でした。矢作川の舟運も流水の減少や道路の整備のために衰退していききました。



(新編岩津町誌より) 川船の断面